

入選

親切な心の連鎖

山形県 糠野目小学校

6年 仲田百杏

「ママ、大変！早くこっちにきて。」

店内中に私の大きな声がひびき渡った。今から4年前、新型コロナウイルスという未知のウイルスが、私たちのあたりまえの日常をすべてうばい去り、生活は一変した。予防のためのマスク、生活に必要な不可欠なトイレットペーパーなど、たくさんの物がスーパーやドラッグストアの店頭から消えた。小学2年生だった私は、商品を求め朝早くから店の外に並ぶ人たちを見て、毎日が不安でしかたなかった。

ある日、学校から帰ると、お母さんと1才の弟といっしょにマスクを買いに行った。店頭に少しだけ残っていた子ども用のマスクをカゴに入れ、買い物カートに弟を乗せて私は少しはなれたところを歩いていた。そのとき、「ドン、ガラガラ、ガチャン！」雷が落ちたような大きな音が聞こえ、ふり返ると、店の床は血まみれになり、うつぶせにたおれた弟が大声で泣いていた。

お母さんが少し目をはなしたときに、弟がカートから落ちてしまったのだ。店の中にいた人たちが、全員時間が止まったかのように、体の動きも音もピタッと止まった。

すると、どこからか「誰か、清潔なタオルと布を持ってきてください。」と声が聞こえ、知らないお兄さんが弟にやさしく毛布をかけてくれた。そして、怖くて今にも涙がこぼれそうな私に、「大丈夫だよ。お姉ちゃんだから、大丈夫。」と私の背中に温かい手をそえてくれた。

そのお兄さんの声とともに、止まったように感じた時間が動き出し、いろいろな人がタオルやティッシュなどを持ってきてくれた。それはまるで、みんなのやさしさや親切な心が次々に連鎖しているようだった。

弟の顔から流れ出す血はなかなか止まらず、血を止めるために両手がふさがっていたお母さんの代わりに、私がお父さんの会社に連絡をしなければならなかった。いつもなら何のこともない、ただ電話をかけるだけのことが、手も声も震えてしまいうまくいかない。そんな私にお兄さんは、「大丈夫、落ち着いて。大丈夫。」と、またやさしく声をかけてくれた。その声を聞き、私は体の力がすっと抜け、落ち着いてお父さんに現状を伝えることができた。

救急隊が到着したとき、もうお兄さんの姿はどこにもなかった。お礼を言えないまま、私たちを乗せた救急車は発車してしまった。次の日、お店の方にお礼を伝えに行き、お兄さんのことを聞いたが誰もわからなかった。

コロナ禍の中、ずっと私たちに寄りそってくれたお兄さん。私たち親子を支えてくれたお兄さんのやさしさを私は一生忘れない。いつかお兄さんに会って、しっかりお礼ができるよう、今度は私が困っている誰かに寄りそうと心に決めた。親切な心の連鎖をつなげるために……。